

研究会	アジア地域統合研究試論（金曜セミナー）第 12 回
テーマ	グローバル化と経済開発 リサーチアジェンダ
報告者	トラン・ヴァン・トゥ（社会科学研究科教授）
日時	2008 年 2 月 15 日（金）16 時 20 分～17 時 50 分
場所	早稲田大学 1 9 号館 6 1 0 教室
参加者	篠原初枝（アジア太平洋研究科教授）、植木(川勝)千可子（同准教授）、各フェロー、院生など。

報告概要：

トラン先生は、グローバル化や経済開発の理論的問題、ベトナムの経験、そしてアジア地域統合プロジェクトとの接点と三つの問題について報告した。

まず、グローバル化と途上国の経済開発について、トラン先生は次のように説明した。経済グローバル化とは、経済活動の自由化、IT の普及による、財・サービス・資本・労働の国際的移動の活発化ということである。途上国の開発にとって重要なのは、貿易自由化・市場開放、直接投資・間接投資導入の自由化、対外的労働移動、各種知識の流入の活発化があげられる。

そして、グローバル化と経済開発への効果が二つある。第一に、成長促進・発展の効率化及び市場促進、資源配分の効率化にある。しかし、ここには二つの問題がある。一つは不安定要因が存在していることである。高度な専門知識が要求される資本市場の管理とフットルース資本への依存が高まり、市場開放の漸進主義が必要である。もう一つは自由貿易の畏のことである。静態的比較優位構造の固定化、動態的比較優位の構築戦略が急務になっている。

第二の効果は、分配の問題である。グローバル化が所得格差ももたらしている。国の中で、国と国の間で所得格差が生じる。IT などの技術の急速な進歩により熟練労働と非熟練労働の賃金格差拡大（Skill premium の問題）をもたらす。しかし、もっと冷静に考えると、国際経済理論のヘクシャーオリーン命題が示唆したように、分配への良い効果を与えることが考えられる。

さらに、グローバル化と途上国の経済開発は、政府の積極的な取り組みが必要となる。市場開放の漸進主義と教育、人材養成などは、全体として社会能力（クズネッツ）の向上（good governance、企業家精神、労働の質的向上など）が要求される。

次に、ベトナムの経験に関しては、グローバル化とドイモイについて説明した。ドイモイは、二つ時期に区分されている。一つ目は、1986 年から 1999 年までである。この時期は、保護貿易、国営企業重視と国家管理が特徴である。そして二つ目は、2000 年以降である。この時期に、民間企業促進、地域統合への参加、グローバル化の潮流への組み入れが特徴である。ベトナムは 1996 年に AFTA に加盟し、2000 年から関税削減を本格的に始めた。そして、2001 年に越米通商協定を締結し、2005 年に中国－ASEAN の FTA を結び、2007 年 1 月に WTO に加盟した。これら一連の出来事は、ベトナムがますますグローバル

化していることを示している。このような状況がベトナム経済にどのような影響を与えるのかという問題が、トラン先生の今の研究課題である。この課題について、今、二つの仮説を考えている。一つは、経済発展は効率化に転換したかである。国有企業関連産業と非国有企業関連産業は、どのような組み合わせが一番効率的であろうかという質問である。そしてもう一つは、グローバル化と所得分配との関係とは何かである。最近、貧富格差の拡大が指摘されているが、所得格差の拡大をももたらした要因は何かを究明する。経済理論を作るとき、簡単に言うと、経済の世界では二つ（例えば、農業と工業）に分けて考えている。その国が持っている資源を最大で使用するように配分する。ベトナムの産業の中で、国有企業関連産業と非国有企業関連産業を、それぞれ縦軸、横軸にしてグラフを作成し、各変化を曲線に表し、その効率性を検討する。

最後に、トラン先生はアジア地域統合との接点を説明した。FTA、EPA による地域統合が進展している。これらはグローバル化ではないが、地域的な統合である。また、後発国にとっては次のような課題が考えられる。第一に、自由貿易の罫にはまらないためにはどうすればいいか。第二に、動的比較優位構造の構築先進国について。第三に、先進国・先発国の協力について。これらの視点は、グローバル COE のアジア地域統合に関連していると考えている。

記録：孫 豊葉 (GIARI アジア地域統合フェロー)

編集：長田洋司 (アジア太平洋研究科助手)